朝日新聞 朝刊 2008年5月6日(火) 文化面

英語と小学生

観流

拙速な教育の危うさ

新学習指導要領が公示され、小学校5、6年生で外国語（ほとんどが英語）が必修となる。試行を経て3年後には完全実施されるという。そんなに早く英語を学ぶ必要があるのか。

昨年出た大谷泰照『日本人にとって英語とは何か』（大修館書店）によれば、明治以降、日本人は「親英語」と「反英語」の間で揺れ動いてきた。ほぼ40年おきに反英語運動が起き、現在は英語礼賛の時代という。斎藤兆史『日本人と英語』（研究社）はそのかっとうを「英語をめぐる愛憎劇」と名付ける。鳥飼玖美子『通訳者と戦後日米外交』（みすず書房）は西山千、相馬雪香、村松増美ら戦後の5人の同時通訳者へのインタビューを通じて、英語のパイオニアがどう学び、どう役立てたかを論じる。

これらの議論に共通するのは、英語を仕事で役立てるには気の遠くなるような個人の努力が必要だということだ。また義務教育の英語では多言語や多文化の存在を知ることがより重要で、寺島隆吉『英語教育原論』（明石書店）は英語教師の仕事の一つに「英語だけが外国語ではない」と教えることを挙げる。

小学校での英語教育に対しても、おおむね否定的だ。鳥飼さんは「小学校ではきちんとした日本語を身につけることが不可欠。早い時期にいい加減な英語を身につけると逆効果」。斎藤さんは「日本人の9割以上は英語ができなくても仕事に困らない。英語が必要な人は文法を勉強した後に大学などで徹底的に鍛える必要がある」と言い切る。

必修化で英語熱がさらにエスカレートする気配だが、達人たちの言葉も参考にしつつ、英語が自分や子供に本当に必要か、冷静に考えたい。

（古賀太）